

一六・七世紀の極東における列強勢力の交替

——『東西洋考』の成立とその時代——

日比野 丈 夫

(一)

一五世紀の初頭、有名な鄭和の遠征が行われてから、百年足らずして一六世紀に入るとポルトガル人の東洋進出が始まった。そのため東南アジアにおける明朝の威令はしだいに衰えたが、中国人自身による海外発展の勢いは少しも後退をみせなかった。ポルトガルにしろ、これに続いたスペインにしろ、その植民地において中国人の勢力が拡大することを決して歓迎したわけではない。しかし、かれらの商業能力を極度に利用しようとして、その来住を拒否しなかったのが、鄭和の遠征のころにはわずかにタイやジャワ、スマトラ島にしかみられなかった華僑の居留地が、各地に増加してくるのである。

東西洋とはいっても東洋と西洋とを一つにまとめることばであるが、これは中国から南方に広く存在する海、乃至はその海中や沿岸にある国々及び海港の意味であって、かつて日本においてはもっぱら南洋と呼びならわしていたところである。つまり太平洋の西部（南シナ海の南部）からインド洋にわたる海域であって、これを東西に分けることは、すでに元代から行われているが、どこを基準にして分けるかは時代によって若干の変遷があった。ここでのべようとする『東西洋考』がつくられた一六、一七世紀のころは、大体いまの広州から正南に引いた南北線がもとになっていたようで、この書ではボルネオ島北部のブルネイからやや東に向かう一線をそれと考えていたようである。

従って、西洋とは交趾、占城 *champa*、柬埔寨 *Camboge*、暹羅 *Siam*、マラヤ半島の大泥 *Patani*・丁機宜 *Trengganu*・彭亨 *Pahang*・麻六

一六・七世紀の極東における列強勢力の交替

甲 Malacca' スマトラ島では北の咂齊 Acheh' 南の旧港 Palembang' ジャワ島の下港 Bantam' ボルネオ島の文郎馬神 Banjarmasin をくつて池悶 Timor 島まであり、東洋とは呂宋 Luzon 島、ミンダナオ島東北の猫里務 Malindugue' 同島の沙瑤 Sianib' 咂哩潭 Dapitan' それから蘇祿 Sulu 島、ボルネオ島北部の文萊 Brunei をへて東南の美洛居 Molucca 群島(香料群島)までを含んでいる。つまり東洋とは東南洋、西洋とは西南洋のことなのである。また西洋とはこの方面からインド洋を越えてアフリカの南端を廻り、さらに西行して達するヨーロッパまで拡大していることもあった。しかし、ヨーロッパは主として西南洋に植民地をもっている本国の所在地という意味から、大西洋(泰西洋または泰西)ともいわれたのである。今日われわれが西洋ということばはこれからきている。

フィリピン群島から東にある台湾は、『東西洋考』では東洋に入れないで東番と称する。のちにはこれを小東洋と称したこともあるが、そのさらに東に位置するのが日本であって、やがて中国人は東洋といえどもっぱら日本をさすようになった。明治以後の日本では、逆にこれを中国を含んだ東アジアという意味に用いるようになったのである。このようにして東洋と西洋とがユーラシア大陸の東部と西部の意味に使われると、むかしの東西洋は一括して南洋といわれたが、この同じ範圍を世界共通のことばとして東南アジア South-east Asia と称するのは、第二次大戦中からのことである。

さて『東西洋考』という書は、今日の東南アジアの明代における諸国志であるとともに、中国とこれらの国々との通交貿易志を兼ねたものといつてよい。出版されたのは明の万曆四十六年(一六一八)で、日本では元和四年、徳川二代將軍秀忠のときである。著者張燮については、薛澄清という人に「明張燮及其著述考」(嶺南學報四卷二号、一九三五)と題する論文があるので、これによってその伝記の概略をのべよう。張燮は福建省南部の漳州龍溪県の人で、万曆二年(一五七四)の生まれ、明朝の滅亡する直前、崇禎十三年(一六四〇)に六七歳で死んだ。父は廷榜といい進士になったが、とくに仕官することなく故郷で文人生活を楽しんだという。張燮(字は紹和)自身も二一歳で郷試に合格し舉人となっただけで、仕官の経験はなかったらしい。明末の遺臣として有名な黃道周よりは十一も年上であったが、とりわけ親しい間柄だったし、曹學佺、何喬遠、陳繼儒ら当時の一流の学者文人とも交友を結んだ。旅行家として知られた徐宏祖(霞客)とも交際があり、かれもまた当時の風潮として旅行を好み、天下の名山を遊歴したようである。

従つて、張燮には文集や詩集を始め著書は多かったらしいが、今日ではすべて失われてしまった。薛澄清の論文によると、張燮は郷里の地方

志の編纂に関係し、『漳州府志』（崇禎元年、一六二八）と『海澄県志』（崇禎六年、一六三三）の二種があるはずだが、これらもまた世に存しないのは残念だとのべている。ところが、今日では中国にもなくなったといわれる、この二つの地方志が日本には完全に残っており、『漳州府志』は内閣文庫に、『海澄県志』は国立国会図書館に所蔵されているのである。この両書には張燮その人の作になる詩文も相当に多く収められ、『海澄県志』の芸文の条には『東西洋考』が著録してある。普通、地方志の芸文の条にはその地方出身者の著作を著録するのであるが、さきにのべたように龍溪県の人である張燮の著作が『海澄県志』に取り上げられているのは、かれがこの県志の編纂関係者であるという特別の事情によるのであろうか。

さて『東西洋考』には蕭基（万曆四五年、一六一七）、周起元、王起宗（万曆四六年、一六一八）の三人の序文があるので（万曆刊本には初めの二序を缺くものがある）、まずこれによって本書成立の経緯を考えてみよう。明朝ではそれより半世紀まえ、隆慶元年（一五六七）に国初以来の嚴重な海禁が解除され、海澄県の月港が貿易港に指定されたので、この地方の人々は公然と海外貿易に従事できるようになった。もともとこの地方は海岸地帯で平地が少なく、食糧物資に乏しいので、生活は何らかの形で貿易に依存しなければならなかったのだから、人々の喜びようは一通りでなかった。一方、国家にとってもかれらに課税すれば、貿易が盛んとなるにつれて収入が増加した。ところが、海外貿易の最大相手である東南アジアの国々の地理や物産などについて、貿易のための手引となるべき適当な書物がないので長らく不便を感じていた。しかも、それらの地方では国名や王朝が時代とともに変遷し、過去と現在とを対比することも容易でない状態である。官庁方面においてもそうした事情を明らかにする必要があつて、張燮に依頼して古記録や現地に往来した人たちの体験などを総合し、この書を作ったのであるという。

(二)

明朝では人民の海外渡航は嚴禁され、国外からの来航も朝貢という形式でしか認められなかった。しかも、朝貢船の到着港は地域によって定められ、東南アジア方面からのものは広州に入港するのが普通であつた。朝貢というのは、歴代王朝がその体面を維持するため、朝貢者が持参した物品に対し、損を承知の上でこれを遥かに上回る賜物を与えたのであるが、朝貢品は政府で消費するほか、余分があれば民間に払下げていた。その場合ある程度の利益はあつたので、政府にとっては外国物資の輸入を統制し、専売権を握るという点から、朝貢は特別の意味をもって

いたのである。

しかし、何年に一度という時期に限った特定国だけの朝貢に頼っていては、外国物資が不足して、政府はもとより民間の需要を満たすことができないのは自然の勢いである。明代すでに東南アジア産の薬材、香料、象牙、真珠などは中国にとって必要不可欠な物資となっていたので、これらの輸入を促進するため朝貢を勧誘するのが鄭和の遠征の目的だったことは今日では通説となっている。明の初めにはこうした積極政策もとられたが、やがで消極的な鎖国方針が大勢を占め、朝貢はしだいに減少の傾向をたどった。そこで、民間商人たちは法網をくぐって、近海の島々に根拠をおき、密貿易によって物資の獲得につとめねばならなくなったのである。いったい中国の浙江省から福建、広東両省にかけての海岸一帯には入江や島が多く、これら密貿易者にとっては恰好の場所であった。そこが東南アジア各地や日本などからやって来た船と、中国船との密会所となり、盛んに物資交換が行われたのである。のちにはポルトガル人もその仲間に加わることとなった。

このような状態が政府から黙認されている間はまだよいが、何か特別の事情で官憲の捜査が行われると、かれら密貿易者たちも生活のために生命がけで防衛策を講じたのである。官憲の捜査がきびしく、近海では危険だとわかると、台湾のごとき海上遥かな島に根拠を移した。そうして、リレー式に大量の物資が運ばれるようになり、勢いその組織も大きく武装した海賊の形をとるにいたった。かれらは根拠をさらに遠い東南アジアや日本などにおき、船隊を組んで東シナ海から南洋を跳梁する。これに応じて中国の方でも、かれらを手引きするものがあらわれ、政府の力では手に負えなくなった。中国の方で倭寇といわれるのはこのようなものでも、その全盛期が十六世紀、とくに同世紀の前半だったのである。

従って、明朝の政治家の中には、倭寇の原因は要するにきびしい海外貿易の禁止のためであるとし、これを幾らかでも緩和すべきだと唱える人も出てきた。もちろん、これに対して祖先以来のおきては軽々に改むべきではないという原則を固執するものもあったが、進歩的な考え方がすれば、海外貿易を許可する代りに、貿易業者からは相当な税金を徴収して、これをもって海軍力を充実すればよいのである。そうして、もし海賊的な行動をとるものに対しては、武力をもって取締れば海上の安全は保障できるわけで、これこそ自給自足の最良策だという。このような政策が実行されたのは、嘉靖四十二年（一五六三）俞大猷、戚繼光らの努力によって、倭寇の討伐が相当の成功を収めたことがきっかけとなったのである。久しぶりで海上が安静に帰した隆慶元年（一五六七）、明朝は国初以来はじめて禁令を解いて海外貿易を許可し、福建の漳州を貿

易港に指定したのであった。

ところで、漳州（州庁の所在地は龍溪県）の町は海から龍江を少し溯った奥にあるので、河口に近い、この州の管轄に属する海澄県が貿易港となった。それは月港といって小さい島の上にあり、ここから龍江を下ると河幅は急に広くなって、厦門 Amoy の南側を通過する。厦門は泉州の同安県に属し、中左所という警備隊のおかれた重要な関門であった。海澄県には海防同知という官を置いて、外国貿易の取締りと関税の徴収を行わせた。中国人の海外渡航についてとくに厳禁されていたのは、外地で越冬することであった。国外からきて近海に碇船し、内地の商人と取引する船を市舶という。その取引は主として澳門 Macao で行われた。中国の商人が国内の物資を積みこんで、海外へ取引に行く船を商舶という。商舶に対して政府から与える許可証を引と称し、給付の手数料を引税といった。そのほかに水餉といって、船の大小に応じて舶商から取立てる税金、陸餉といって、商舶が持ち帰った物資を買取る商人から取立てる税金があった。また加増餉というのがあって、フィリピン向けの商舶（呂宋船）は現地に適当な物資がなく、代りにメキシコ銀を持ち帰るものが多かったため、これに課した税金である。このように中国物産を輸出する代償として、フィリピンから流入するメキシコ銀は莫大な量に上り、それが後に中国を銀本位国にする一つの原因となったのは周知の事実であろう。当時、海澄県の市場ではメキシコ銀が一般の取引きに通用していたことが、前記の『海澄県志』の中にみえている。

海外貿易が盛んになった結果、海澄県で徴収される税金は順調に増加して、万曆三年（一五七五）にはいちおう責任額が六千両と定められたのが、翌年には一万両となり、同じく十一年には二万両、二二年には二万九千両にも上った。そこで、泉州側の厦門にも税関を設けて東洋向けの商舶を管理させ、漳州側の海澄県にはもっぱら西洋向けの商舶を管理させ、分担して税金の徴収を行わせる方が有利だという提案も行われたほどである。

(三)

『東西洋考』はこのような当時の唯一の海外貿易港であった漳州、またはその外港である海澄県を中心として書かれたものであるから、そこからもっとも近い東洋の呂宋についての記事はとくに詳しい。また他には見られない独特の資料をも含んでいる。いったい、フィリピンは一五二一年にスペインのマジェランによって発見され、一五四二年スペインの皇太子（のちのフィリペ二世）の名をとって命名されたのであるが、ス

ペインはこれよりさき新大陸のメキシコの経営を終え、太平洋を越えてここに達したのであって、フィリピンはメキシコの支配下に属していたわけである。そうして一五七一年（隆慶五年）にレガスピーがマニラ市を建設してから本格的な開発が進められ、とくに中国本土の福建省南部から渡来してきた華僑を優遇し、かれらに新開地のスペイン人が必要とする食料や種々の物資を輸送させたのであった。商業に熱心なかれら華僑はこれに応じて続々と移住を始め、やがてマニラ市は人口数千、その大部分が華僑によって占められる都市となったのである。華僑が中国本土から輸送してきた物資の代償として、持ち帰ったのは、殆んどスペイン人がメキシコからもたらした銀貨であったことはすでにのべた。

スペイン側の史料によると、マニラ市建設後まもなく一五七四年（万暦二年）リマホン Linahong という中国の海賊が、大艦隊をひきいて侵襲してきた事件があった。このことは『東西洋考』の中にはみえないが、一五八五年刊のスペイン人ゴンサーレス・デ・メンドーサ Juan Gonzales de Mendoza の『シナ大王国誌』に詳しく記されている。ここにいうリマホンは林鳳または林阿鳳のことで、広東省の潮州饒平県の人、『明実録』隆慶六年（一五七二）八月庚辰の条に初めてその名が見えるが、そのころしばしば福建省の海岸地域を掠奪し、澎湖島から台湾にまで勢力を張っていた海賊である。メンドーサによると、リマホンは一五七四年（万暦二年）一月二九日から六二隻の艦隊をひきい、マニラ市を攻撃せんとして、ルソン島のイロコスを経てマニラ湾口のコレヒドール島に到着した。その部将である日本人シオコ Sioo というものがまず七百人を引率して上陸し、これを迎え討ったスペインの司令官ゴイティ Goiti とその妻はあわれにも犠牲となった。合戦の末、林鳳の軍はいったん撃退されたが、再び一千人の軍勢をもって攻撃を開始した。しかし、このときには在留の華僑がスペインの総督ラベサレス Guido de Lavezares（維撒里）に協力を申し入れ、合同作戦が成功して、林鳳は船に乗ってカビテ島まで退却を余儀なくされたのである。

ところが、この林鳳の二度にわたる攻撃に刺戟されて、マニラ市では土人の叛乱がおこり、教会が破壊されるようなこともあったが、やがて平静に帰した。そこで、林鳳はマニラ市の奪取を断念して、カビテ島よりパンガシナン河口へ退き、その上流四リーグの地に基地を築いて永住の計を立てようとしたらしいのである。スペイン総督のラベサレスはこれに対してマニラ市の防備を固めるとともに、一五七五年（万暦三年）三月二三日、五七隻の船にスペイン兵と土人兵とを分乗させ、林鳳軍の基地に攻撃をかけた。スペイン軍は攻囲の手をゆるめず、四カ月にわたる防禦に疲れた林鳳は、同年の八月四日、手もとに残った三四隻の船をひきい、包囲を破って脱出した。その後一時、澎湖島に滞留したのち、浙江省の南部や福建、広東の両省を寇掠したが、撃退されて安南方面へ逃亡し、そこからついに消息を絶ってしまったのである。

これよりさき、スペイン軍が林鳳の基地を攻囲していたとき、一隻の中国船がマニラに到着した。中国商人の通訳によると、その船にはオモコン Onocon という名の中国軍人が乗りこんでいることがわかった。これは福建巡撫が林鳳の様子を探査させる目的で派遣した把総の王望高であり、いま一人のシャオゴ Siego という小柄な老人というのが南日水寨の把総である邵岳にあたることは、中国側の文献ともよく一致している。このとき林鳳軍は完全な包囲中であつたので、降服はもはや時の問題であるとして、スペイン総督と王望高との間に、スペインは林鳳を捕虜にして中国側に引渡すのと交換に、王望高はキリスト教の中国内地布教の許可が得られるよう斡旋するという約束が成立した。そこで、王望高はアウグスチン会の宣教師二人とスペイン軍人二人を帯同して帰国することとなるが、このときの旅行記がメンドーサの『シナ大王国誌』の中に詳しくみえる。その筆者は上記宣教師の一人マルチン・デ・エーラーダ Martin de Herrada と軍人の一人ミゲル・デ・ロアルチャ Miguel de Loarcha である。

王望高の一行は一五七五年（万暦三年）六月十二日にマニラを出発、厦門に到着し漳州をへて福州に至り、ここに逗留すること約一カ月で、十月二八日マニラに帰着した。王望高は本国では、林鳳を追いつめて窮地に陥れたのを自分の功績だといい、あるいは自分がスペイン兵をひきいて包囲を成功させたのだから、スペイン兵に賞金を与えてやってほしいなど、でまかせをいって、そのうえスペイン総督から中国官憲に対する贈りものの大部分を横領したようなこともあった。そうして、スペイン側に約束したキリスト教布教の斡旋に熱意を示さないのみか、中国からマニラへもどる途中、漁夫から林鳳がスペイン軍の包囲を脱出したことを聞くと、マニラに到着してからスペイン総督に向っていろいろな難題を吹きかけて困らせたということである。このような不信行為は、その後スペイン人をして中国人に多大の警戒心を抱かせるものとなったという。

この事件はさきにも述べたように『東西洋考』にみえないのは、思うに中国側にとって不名誉なことだったからかも知れない。しかし、真相の不明な倭寇の一面を物語る史料として無視できないものがある。その後約二十年をへて一五九三年（万暦二十一年）、スペインのマニラ総督ゴメス・ペレス・ダスマリナス Gomes Peres Dasmarias（郎雷氏敵裏系勝）が自から艦隊をひきいてモルッカ群島（美洛居）に遠征して自国の権利を確保するとともに、当時ようやくこの方面に進出を始めたイギリスの勢力を排除することとなった。このとき、マニラ在住の中国人二五〇人が強制的に従軍を命ぜられ、スペイン軍人のために極度の虐待を受けたのである。中国人の幹部たちは共謀して報復手段に出で、ある

夜、潘和五ら数人が突如として総督に襲いかかってその首を切り落した。そうして、驚き騒ぐスペイン人をみな殺しにし、ことごとく財宝、武器を奪って、船ごとベトナム方面に逃亡してしまった。

この知らせはスペイン当局に非常な衝撃を与え、殺された総督ダスマリナスの子ルイ Luy Peres Dasmariñas（郎雷猫吝）が臨時の後任総督となり、中国に対して抗議するとともに、マニラ在留の中国人五千人の強制送還を行った。あたかもこのころ、日本からは豊臣秀吉がスペイン総督にあてた降伏朝貢を求める恐迫状が到着して、日本と中国とが共同戦線を取ることも予想され、スペイン側の中国人に対する警戒が俄かに嚴重となった。やがて一五九五―九六年にかけてマニラ郊外には中国人のため新たに居留地が設定せられ、一五九六年にはさらに一万二千人の中国人が強制送還されたのである。

ところが、一六〇二年（万曆三十年）になると、漳州から中国官吏が派遣されてフィリピンの金鉱探索を行うという珍事がおこった。というのは、明朝では永年にわたった宮廷の奢侈に加えて内乱頻発のため国費の欠乏をきたし、政府は財源あさりに狂奔して、悪税や増税に国民は疲れ果てたのである。これに乗じて宦官が横暴をきわめ、かれらは金鉱開発を奨励するためだと称して国内各地に派遣され、あらん限りの悪事をはたらいって政府の信用を失墜させた。なかでも、漳州に派遣された高来というのは悪辣をきわめ、貿易税を極端に課重したのはもちろん、徹底的な搾取を行って私腹を肥した。『東西洋考』にはとくに税璫考という一卷を設け、その状況を詳細に記していて、他書には見られない史料として珍重すべきものがある。高来がもっとも問題をおこしたのは、さきにのべたように呂宋在住の張巖というものから、同島の機易山（カビテ島？）に金鉱が出るといつてきたのを信用し、反対を押しきって海澄県丞の王時和らを呂宋へ派遣したことである。その結果、金鉱が出るといふ噂は全く事実無根だということがわかったのだが、これがスペイン側の誤解を招き中国に対する感情を悪化させた。ついにその翌年一六〇三年（万曆三十一年）、二万五千から三万人に上るといわれる在留中国人が虐殺された、フィリピン最大の惨事がおこったのである。

やがて十年ばかりして、一六一四年（万曆四十二年）高来は失脚して中央に召喚された。この地方の人々が快哉を叫んだのはいうまでもあるまい。四年後に出版された『東西洋考』にその悪事が特筆大書されているゆえんであろう。高来が福建に在任したのは一五九八―一六一四年（万曆二六―四二年）の十六年にわたった。金鉱開発のことはすでに一六〇六年に停止されているが、一六一四年には広東省の徴税を兼任し、その地方においても怨嗟の的になったということである。

(四)

さて『東西洋考』が作られたのは、ポルトガル、スペインの東洋における覇権はすでに衰えんとし、新興のオランダがこれに代って進出を始めたときであった。ひるがえって思うに、ポルトガルは一四九七年ヴァスコ・ダ・ガマが喜望峯廻りのインド航路を発見して以来、一五〇二年にはインドのゴアを占領し、一五一一年にはマラッカを、翌年にはアンボイナ島を取って、モルッカ群島を支配下においた。トメ・ピレス Tome Pires を広東に派遣して、中国との直接通商を企図したのは一五一七年のことである。その後一五五七年（嘉靖三十六年）にいたり、ようやく澳門 Macao に根拠地を得て極東貿易を独占し、とくに日本貿易では巨利を収めたのであった。そのため、スペインはフィリピン群島に釘付けにされたままで、極東において自由に手足を伸ばすことができなかった。

一六世紀の末に近づく、オランダの進出の勢いがめざましく、ポルトガル領のマラッカと澳門間の海上連絡も、オランダ艦隊のためにしばしば遮断されるという状態で、澳門を中心とするポルトガルの極東貿易もようやく凋落をみせはじめた。ことに一六一三年（慶長一八年）からの日本におけるキリスト教の禁止は、貿易と布教との関係を不可分のものとするポルトガルやスペインの立場を著しく不利にしたわけである。これに対して、オランダは一五八一年スペインから独立して以来、極東への発展をめざし、一五九六年にはジャワ島のバンタム Pantam（ジャカルタの西北）に到達し、一六〇五年以後はモルッカ群島に勢力を伸ばすとともに、マラヤ半島など各地に積極的に根拠地を求めた。一六一九年（万曆四七年）すなわち『東西洋考』が出版された翌年には、オランダの総督クレーン Jan Pieterszoon Coen がバタビア市を建設して、蘭領インド経営の基礎を築いた。そうして、イギリスのモルッカ群島への進出を防ぐために、アンボイナ島の虐殺事件をひきおこしたのは一六二三年のことである。『東西洋考』の下港、すなわちバンタムの条には、オランダ人（紅毛）が近ごろ礼拝寺（キリスト教会堂）をそこに建設したと記している。

ポルトガル、スペイン人が中国人からフランキ（仏郎機）と呼ばれたのに対し、オランダ人は紅毛といわれた。ちなみに、フランキとは西アジア人がポルトガル、スペイン人をさした呼び名である。『東西洋考』では、この紅毛の極東進出について非常な関心を示している。本書では日本と紅毛番とに一巻をあてているが、後者の概要をのべるとつぎのごとくである。紅毛はスペインが呂宋を根拠にして中国と貿易しているの

を羨望し、大艦をもってジャワとマライ半島東岸の大泥 Patani との間を横行し、どこかに然るべき基地を獲得しようとしている。かつてオランダ人は呂宋に向ったがスペイン側から相手にされず、また澳門に向ったがポルトガル人に撃退された。ここに呂宋に向ったというのは、一六〇〇年オランダの提督ノルド Oliver van Noordt がフィリピンを襲撃したことをさすのであろうか。

ところが、海澄県出身で永年にわたり大泥に居住していた李錦というものが、同志とともにオランダ提督の韋麻郎（『東西洋考』に麻章郎と書くは誤り）Wybrand van Marwyck に、当時漳州にいた宦官の高策に賄賂を贈れば、澎湖島に基地を設けることができようと提言した。オランダは早速これを実行に移そうとしたが、中国官吏の嚴重な反対にあつて実現の見込みが立たなかった。一六〇四年（万曆三十二年）のこと、焦燥にかられたオランダ側は二隻の大艦を派遣して澎湖島上陸を強行し、既定事実をつくりあげんとしたようである。しかし、結局オランダの企図は失敗に終り、何ら得るところなくして大泥に帰ったのであった。以上はただ『東西洋考』にのみ伝えられ、『明史』外国伝の和蘭の条はもっぱらそれによっているのであるが、事實はオランダ側の記録ともよく一致しているようである。

オランダが台湾を占領するのは、ようやく一六二四年（天啓四年）になってからで、その占領は一六六一年（順治十一年）鄭成功に追出されるまで四十年近く続いた。やがて、オランダがポルトガルの日本における根拠地平戸の代りに長崎を開かせ、ここで日本貿易を独占するようになるのはその間の一六四一年（崇禎十四年、寛永一八年）のことである。ポルトガルからマラッカを奪取したのも、同じく一六四一年のことであつた。

本稿は何年かまえ、自分がかつて奉職していた京都大学人文科学研究所の夏期講座における講演筆記に、若干の手を加えたものである。公開講座の性質上、根拠とした史料などは殆んどあげることができなかったもので、つぎにその主なものを列挙しておく。

(一) 東西洋の区別については、次の二論文がある。和田清「明代以前のシナ人に知られたるフィリピン諸島」（東洋学報十二卷三号、のち『東亜史論叢』に収録）、宮崎市定「南洋を東西洋に分つ根拠に就いて」（東洋史研究七卷四号、のち『アジア史研究』第二に収録）。

(二) 『東西洋考』の内容、卷一―四西洋列国考、卷五東洋列国考、付東蕃考。卷六外紀考（日本、紅毛番）。卷七税餉考。卷八税増考。卷九舟師考。卷十一芸文考。卷十二逸事考。

(三) メンドーサの『シナ大王国誌』は、岩波書店刊「大航海時代叢書」VI、長南実、矢沢利彦両氏の訳本によつた。関係記事はその第二部第一巻にみえる。フィリピン総督ラベサレスの後任者であるサンデ Francisco de Sande の、林鳳事件についての本国に対する報告書などは、パステルス P. Pablo Pastells の Histoire générale de Filipinas 第二卷（一九二六年刊）におさめられている。

四 林鳳ならびに潘和五事件については、陳荆和氏の『十六世紀之菲律賓華僑』（一九六三年刊、東南亞研究專刊之二）に、東西文献を比較対照したきわめて詳細な考証がみられる。

五 スペイン統治時代のフィリピンについては、次の有名な大著の關係部分に詳記されている。Blair, Emma and Robertson, James A: The Philippine Islands, 1493—1898, 55 vols., 1903—1907.